



クリスマス当日――

フレアはサンタ衣装に着替え、メンバー限定の甘々雑談配信をするべく準備をしていた。

その最中、インターフォンの音が鳴った。

フレアは突然の来客に首を傾げながら玄関のドアを開けて――凍りついた。

「よお、久しぶりだなあフレアw
お？ サンタコスか？」

いいねえクリスマスっぽいじゃん」

「せ、先輩……!?!
どうして、ここが……」

「ちよいと昔のツテを辿ってな。
邪魔するぜ?」

あなたははずかずかと
フレアの家に上がり込んだ。

「ちよ、ちよっと! 帰ってよ!
あたしはもうあんたの顔なんて
見たくないの!」



「冷たいこと言うなよ。
あんなに愛し合った仲だろ？w」

「……ッ」

からかうように言うのと
フレアは長い耳を真っ赤にした。

あなたはかつてフレアと
同じ高校に通っていた先輩で
短い間だが恋人として付き合っていた
時期があった。

学園一の美少女として有名だった
フレアを落としたことを
あなたはよく自慢していたものだ。

しかしながら
あなたとフレアの関係は学生らしい
清らかな関係とは程遠い淫欲に
満ちたドスケベ極まりないものだった。

あなたはフレアのご主人様として、
フレアはあなたの肉便器として、
乱れに乱れた学校生活を送っていた。



当時、まだ男を知らなかったフレアは
あなたの外面に騙されてまんまと股を開き、
そのテクとデカちんで快楽の虜へと堕ちていった。

まさしく言いなりだ。
あなたの言うことならどんな
命令にでも従った。

ときにはあなたの内申点のために
教師のちんぽをしゃぶり、
あなたの小遣いを稼ぐために
クラスの男子に抱かれることもあった。

それは、家族にもホロメンにも
誰にも言えないフレアの秘密だった。

「聞いたぜフレア？」

お前今、ホロライブとかいうところで
アイドルやってるんだって？

すごい人気らしいじゃん。

もし今、俺との関係が明るみに出たら
それはそれは荒れるだろうなあw

「あ、あんたの言うことなんて
誰も信じない……っ」

「へえ……こいつを見ても？」

当時のハメ撮り映像を見せつけると
フレアは絶望的な顔で押し黙った。



「な、何が目的なの……
お金なら払うから
昔のことをバラすのだけは……」

「金もいいが……
俺の目的はお前の
アイドルまんこなんだよなあ」

あなたはフレアのスカートに手を突っ込んで
パンティの上から割れ目をなぞった。
フレアの背筋がぞくぞくと震える。

「む、無理よ、できない……」

あんたみたいな男に、また身体を許すなんて……
やっと忘れられたのに……あ、だめっ♡ 触らないで♡」

「くく、弱いところ変わってねえなあ」



「ま、待って、お願い……
い、今のあたしは
リスナーのみんなが大事なの
裏切りたくないの♡」

「おいおい
悲しいなあフレア……
昔はあんなに従順だったのによお。
そんな態度取られちゃうと俺、
うっかり動画を流出させちゃうかもよ？」

「や、やめて……
それだけはあ……♡」

「やめて欲しけりゃ
どうすればいいんだ？」

「わ、わかったわよ……
相手すればいいんでしょ……!!」



「そ、その代わり、ゴムだけは絶対につけて。
昔みたいにナマでなんて無理だから……」
「ひひ。わかったよ」

白々しい返事をして
あなたはフレアをベッドに連れ込んだ。
フレアは抵抗こそ諦めたものの
その瞳はあくまでも嫌悪感を示している。

「相手するとは言ったけど
それ以上のことは期待しないでよね……
あんたのちんぽなんかで感じてやる義理はないんだから。
マグロ女相手に必死に腰へこししているとこ見て、わ、笑ってやるわ」
とかなんとかイキっていたフレアだったが――



「んほおおおおお、お、おオオ
イぐうううううう——ッ♡♡♡」

ぶしやあああああああああッ♡

濃厚な淫臭を含んだ愛液が
ベッドの上にぶち撒けられた。

「ま、待つへえ♡
今イってるからあ♡
止まってえええ♡」

「おいおい、またかよ。
お前がいく度に止まってたら
こっちは全然気持ちよくなれねえっての……
ま、俺は優しいから待ってやるけどなw
おい、ありがとうございますは？」

「ああっ♡
ありがとうございませゅ♡」

それは紛れもなく本気の感謝の言葉だった。



(や、やっぱりこいつのちんぽやばすぎ♥
あれから何年も経ってるのに♥
挿れられた瞬間に全部思い出しちゃったよお♥)

フレアは必死に呼吸を整えている。

その間も膣壁が「びくっびくんっ♥」と蠕動を続けていて、
フレアのまんこがあなたのちんぽを歓迎しているのが
ゴム越しにもはつきりとわかった。



「まったく、あれだけ大口叩いたからには
それなりに経験積んでるのかと思ったら、
全然じゃねえか。」

挿れた瞬間に即イキだもんなあ……
そういうや、お前の処女を食ったときも
こんな感じだったっけw

「や、やらああ♥ 言わないでええ♥」

「お前、確かあんときもゴムつけろって
俺に言ったよな？
妊娠怖いから避妊してください……とか
しおらしい感じでさw」

だからあなたはコンドームをつけてやった。
しかし——



「ンで……フレアちゃんの初体験は最終的にはどうなったんだ？ ほれ、言ってみろよ」

「い、言えないよお♡」

「じゃあ俺が言ってるよ。最終的には、お前が自分からナマハメおねだりしたんだよな？」

俺が、ゴムなしでするのはゴムありより何倍も気持ちいいって教えたなら、すぐに股開いてナマチんぽ欲しがりやがったW」

「う、ううう♡ だってえ♡
あのときは先輩が……
ナマでしてもそう簡単に孕んだりしないから、大丈夫って言うから……♡」

「ああ、あの頃のフレアは可愛かったなあ……
俺の言うことなんでも信じてさW
懐かしいなあ……なあ、やっぱり俺達やり直そうぜ？
お前のまんこもそれを望んでるってW」

「そ、そんなこと……
望んで、ない……もん♡」



[illegible]

「♡♡」

あなたはフレアの膣内で何度目かの射精を迎えた。
コンドームで守られているとはいえ、
その熱と量はフレアに得も言われぬ快楽と戦慄を与えた。

おおっ

普段のアイドル然とした愛くるしい表情はどこへやら、もはやフレアはちんぽのことしか考えられない下品なメス顔を晒してアヘアへと喘ぐばかりだ。

あなたはちんぽを引き抜くと、
水風船のように膨らんだゴムを投げ捨てる。
そしてすぐに次のゴムを装着して、
休む暇を与えることなくフレアまんこを再びぶち犯す。

「んはああああああッ♥♥
おちんぽ♥ また入ってきたあああ
もう何回も出してるのにい♥
このおちんちん全然ちっちゃくならないよおお♥」

「俺の絶倫ぶりはお前も知ってるだろ？」

「し、知ってゆ♥
あたし、いつも……き、気絶するまで
先輩に犯されてたあ♥」

「そうそうw
で、お前が意識飛びそうになったときはこうして……」

「ああああアアン♥
子宮口ごりゅごりゅされるのしゅきいい♥」

フレアにもはや抵抗の意思はなく、
数年ぶりに味わうであろう本気アクメに酔いしれるばかりだった。
このスケべまんこも、デカパイもデカケツも、
すべてがあなたの所有物であるのだとようやく思い出したようだ。



「なあフレア
そろそろ素直になったらどうだ？」

「や、やだ♥ 無理なの♥
それだけは、だめえ……♥」

あなたの言わんとするところは察しているようで、
フレアはぶんぶんと首を横に振る。
あなたはフレアの耳元で、ねっとり囁きかけるように、

「おおっっっ」

「おおっっっ」

「無理すんなよ……欲しいんだろ？
俺のナマちんぽが」

（ほ、欲しい♥ でもお……♥）

「だ、駄目なんだってばああ♥」

「じゃあこうしようぜ。
ナマでハメても、絶対に中では出さないからさ。
それならいいだろ？」

「ほ、ほんと？ほんとに、中には出さない？」

「ド
チュッ」

「ド
イクッ」

「ド
イクッ」

「おほおオオオ♥

しゅ、しゅっごおお、これえええ♥

ナマちんぽやつべ♥

ゴムありでするのは全然違うよおお♥

もっと、もっと奥まで突っ込んでえ♥

先輩の力り高ちんぽで

フレアの気持ちいいところ

ぐりぐり挟ってえええ♥」

「あーん、先輩だあ？

違うよなあ？

二人きりのときはなんて呼ぶんだった？」

「ああっごめんない♥

ご、ご主人様でしゅうう♥」

「よしよし、いい子だな……

ほら、ご褒美にちゅーしてやるぞ」

「んちゅううううう♥」



容赦ないキスハメによって
フレアの理性はどろどろに溶かされて
いよいよ後戻りのできないところまで
知能が低下していた。

「なあ、フレア……
俺、そろそろイキそうなんだけど」

「ふあっ♡」

「じゃ、じゃあ、もう抜かないと……♡」

「いや、もうちよつとさ……
ギリギリまでお前の中を
楽しませてくれよ、な？」

「で、でもお♡」

「おちんぽ、こんなにビクビクしてして……
い、今にもお射精しちやいそうだよお♡」

「ああっほらあ♡
今、熱いのがびゅぷって漏れ出しちゃったあ♡」

「へーきへーき、我慢汁だってW
イク寸前のタイミングが一番気持ちいいんだから
オナホはオナホらしく犯されてりゃいいんだよ」



「そんなに心配しなくても
ちゃんと外に出してやるってw」

「だ、だ、だけど……♥
ご主人様、そうやって言っていていつも
あたしの中に出してたよお♥」

「そんなことねえって……あ、やっべw」

「ひぐううううううううううう——ッ♥♥♥」

あなたはフレアのおまんこに
根本まで突っ込んだまま、
当たり前のように種付けを行った。

「いやー悪い悪いw
お前のまんこがよすぎるもんだから
うっかり暴発しちゃったよ……w」

「う、嘘、つきい……♥
絶対に最初から……
あたしのこと、孕ませようと……♥」

（な、なかだひ♥ 気持ちいいイイ♥
この人の言うことなんて信じちゃいけないって
わかってるのに……♥
おまんこ屈服しちゃって逆らえないよお♥
らめえ♥ また昔みたいになっちゃううう
もう肉便器に戻るの嫌なの……♥）



——数時間後、フレアのスマホからアラームが鳴り始めた。

「あん？　なんだあ？」

「あつ……は、配信の、時間……♡」

「配信？」

「きよ、今日、クリスマスだから……
リスナーのみんなと、過ごそうと思って……♡」

「へえ、そうなのか」

他人事のように呟くと、
あなたはアラームを止めてフレアのスマホを投げ捨てた。

ぽん



「配信なんていつでもできるだろう？
それより今は俺のちんぽの方が
優先だよな？」

「で、でも……もう告知しちゃってるし……♥
ファンの人もたくさん待機してくれてるから……
い、行かないと♥」

「おいおい、まだ五回しか中出ししてないんだぜ？
そんな程度じゃお前のエロまんこは満足しないだろう？」

「そ、それは……♥」

（欲しい……もっと♥
ご主人様のデカちんぽでおまんこ
ぐちゃぐちゃにして欲しい……♥）

はー♡

はー♡

トク……

ぐちゃ



「ほれ、どうなんだ？」

フレアはいい子だから肉便器のあるべき姿
つてのをわかってくれるよなあ？」

「あ、あああ……わかり、ましたあ♡
んぢゆるるる♡」

フレアはなんの迷いもなくあなたのちんぽを選んだ。

「ご主人様の言う通りですう♡

リ、リスナーさんと恋人ごっこするより

ご主人様の肉便器として一発でも多く

お射精してもらおう方がずっと大事ですう♡

たった数年で、これくらいのマナーも忘れちゃった

フレアのおまんこをどうかお仕置きしてください♡」



ぽー

はー♡

はー♡

トク……

「くくく……w
そうそう、そうこなくっちゃなw」

そこにいるのは、
あなたの記憶となんら相違ない
当時のフレアだった。

言いなりとなつていつでもどこでも喜んで股を開き、
命令されれば他の男に抱かれることも厭わない、
生粋の性奴隷である。

だからこそあなたは、
フレアがアイドルをしていると知って驚いたのだ。

こんな生まれながらのオナホ女に
アイドルなんて務まるのか——と。















